



TITLE:

<大會抄録>緬滇ルート探査とマーガリー事件

AUTHOR(S):

神戸, 輝夫

CITATION:

神戸, 輝夫. <大會抄録>緬滇ルート探査とマーガリー事件. 東洋史研究 1979, 38(3): 484-484

ISSUE DATE:

1979-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153743>

RIGHT:

(十七世紀前半)等の史料に依って、明末の業食佃力の特徴について試論を提示したいと思う。

緬滇ルート探査とマーガリー事件

神戸 輝夫

ヨーロッパ人による緬滇ルート探査は、十七世紀以來試みられた長い前史ともいふべき部分があるが、今回の報告では、その部分は置いて、一八六八年、一八七五年の二回にわたってイギリスの調査隊によっておこなわれたものをとりあげる。

一八六八年の探査は、スレイドン大尉(E. B. Staden)を隊長とするもので、一行は、バーモ(Bhamo)を二月二十六日に出發し、雲南省の西部騰越廳に五月二十八日到着し、九月五日、バーモに歸還した。この探査の結果、バーモ・騰越間に、三本のルートのあることが確認され、これらのルートによる貿易の發展を期するため、騰越の回族指導者である李國綸や、ルート沿いの少數民族の首領らとの間に、關稅についての非公式のとりきめが行なわれ、バーモには、副政府代理人(Assistant Political Agent)が設置されることになった。

一八七五年の探査は、ブラウン大尉(H. Browne)を隊長とするもので、その目的は、雲南省に起った新しい事態、すなわち、回族反亂の鎮壓、清朝支配の再確立に對處し、貿易ルートの再開を求めることにあつた。一行を支滞なく雲南へと導くために、中國滞在の

マーガリー(A. R. Margary)が、清朝から發給された護照パスポートを所持し、騰越からバーモに向い、一月十七日、ブラウン隊と遭遇した。マーガリーは、調査隊の先導となり、騰越に向け進んだが、途上で殺害された。マーガリー殺害の犯人は何者か、又その動機は何か謎の部分が多い。

嘉慶白蓮教反亂の特質について

小林 一美

「嘉慶白蓮教反亂の解剖は、中國前近代における宗教反亂とりわけ白蓮教系反亂の解剖の第一歩である」という立場に立つて、嘉慶白蓮教反亂を宗教現象、政治現象、軍事現象の三つの側面に分解し、三つの側面の固有の位相を明らかにする。そして、この三つの位相の關係性の總體として嘉慶白蓮教反亂の特質を浮びあがせると同時に、中國前近代の宗教的反亂とりわけ白蓮教系反亂が持つ「構造的負の世界」の存在を主張したい。

「構造的負の世界」という概念は、歴史の深層あるいは歴史の暗部が持つ非連續の連續性、非時間性、始源的なるものへの回歸性、エロスの共同體志向、神話論的宇宙觀などに象徵される歴史の磁場にあたえた概念である。